

最高到達点

札幌市立八軒東中学校 3 学年だより

2024.5.29 NO5 村田 昌敬

みすのくの旅 修学旅行記 ①

みなさんを修学旅行に送り出してくださったおうちの方に是非、お土産話をしてほしいと思います。そのためのネタとして少々旅行記を綴らせていただきます。また、これはみなさんがおじさん・おばさん、あるいはおじいさん・おばあさんになってから読み返すと懐かしくて楽しいと思います。

5 月 19 日（日）。晴れ。爽やかな天候である。生徒の集合時刻は 4:45 だというのに、4:30 の時点で 20 名以上の生徒がきている。御苦労さまである。一番乗りは 4 時にポツリと校門の前に立っていた M さん。明らかに早すぎるが、遅れるよりは良い。今回の旅の最初のハードルがこの「早朝出発」である。果たして 4:45 までに全員が集合できるのか。やたら大きな荷物の生徒が多い。「2 週間の海外旅行？」という感じ。一体何が入っているのか不思議でならない。コロコロ（キャスター付きのハードなスーツケース）が圧倒的多数。巨大なコロコロも数名。階段が心配である。有賀 T と増田 T は、昨夜は早くに布団に入ったのに遅くまで眠れなかったと言っていた。さすが若者である。私は加齢のためドキドキしたりワクワクする機能が衰えているのでそういったことはない。続々と生徒が集まってくる。元気な挨拶がナイスである。集合時刻には全員がそろい、予定の時刻にバスは出発。最初のミッションは見事クリア。おうちの方の支援にも感謝したい。すばらしい人たちである。早朝から見送りに来てくださった家族のみなさんに感謝したい。

バスが出発すると、私の斜め後ろの A さんは「もう帰りたい」「おうちが恋しい」「ホームシック」等と言っている。もちろんジョークである。楽しい人である。札幌駅北口交番の前で降車。日本の交番の看板にはなぜか「こうばん」なのに「KOBAN」と書かれている。「猫に小判」を連想してしまうのは私だけであろうか。札幌には瀬田先生と岩井先生が見送りに来てくれていた。早朝だというのに。二人はルフィーとチョッパーの扮装をし「元気に行ってらっしゃい！楽しんでね！」という横断幕まで用意してくれていた。感謝感激である。コスチュームの完成度が高いためか一般客に頼まれて写真を撮られていた二人であった。特急北斗 2 号への乗り込みもとてもスムーズでナイスであった。

次はお待ちかねの朝食タイム。ざっとみたところ、サンドイッチ派が 10 %、おにぎり派 70 %、やたらとゴージャス派が 20 %といったところ。自分で作ってきたという生徒も数名。立派である。4:45 に中学校に集合するためには何時から作り始めたのであろうか。お弁当の準備をしてくださったおうちの方には感謝しかない。写真屋さんが二人ずつ、写真を撮って回ってくださっている。1 枚ずつとっても 60 ショット。たいへんなお仕事である。自由時間になると、元気にカードゲームなどをして遊ぶ生徒たち。人狼ゲームの声も聞こえる。かつてはウノとトランプしかなかったのだが、カードゲームの進化には驚くばかりである。車内には「仕切り上手」な生徒の声が響く。電車の中で、おやつ交換などを楽しみながら、ダラダラとカードゲーム。「これぞ日本の伝統の修学旅行！」と言えよう。中学生の日常生活はとても忙しい。いつも時間に追われる毎日なので、この「ダラダラした時間」はとても貴重である。9:17。あっという間に北斗 2 号は新函館北斗駅に到着。一行は新幹線に乗り込んだ。

東北新幹線「はやぶさ 18 号」のスピードと静かさはすばらしい。日本の鉄道技術万歳！である。青函トンネルができた当時の修学旅行生の「あるある」に「海底トンネルへの期待」があった。言うまでもなく青函トンネルは地中にあり真っ暗なトンネルである。しかし、当時の中学生には「海底トンネルからお魚が見える」という期待があり、がっかりする生徒がかなりいたのである。近年は、さすがにそういう話は耳にしないと思っていたのだが、なんと、今回も「青函トンネルからお魚が見る」と期待していた生徒がいることが判明。なぜかちょっぴりうれしい気持ちになった私であった。ちなみに私は、特急や新幹線のトイレを見学するのが好きである。そこには目を見張るような楽しい技術がちりばめられている。11:43。文字通り「あっという間」にはやぶさ 18 号は盛岡駅に到着。

まことに爽やかな好天に恵まれ、一行は盛岡市の自主研修に出発。班ごとに計画を立てて盛岡のいろいろなところを見学し、昼食も班の仲間ととりながら 15:30 まで自主研修をするという企画である。主な見学先としては、桜山神社、老舗の白沢せんべい店、盛岡城跡公園、三陸菓匠さいとう、盛岡八幡宮、岩手銀行赤レンガ館、もりおか啄木・賢治青春館、関口屋菓子舗、三石神社、石割桜、マリオス展望台など。昼食は、有名な盛岡三大麺（わんこそば、じゃじゃ麺、盛岡冷麺）ねらいや焼き肉レストラン米内、駅前食堂（地味？）、銀河離宮、寿々苑など。班の仲間と盛岡の名所を見学したり、お土産を買いながらお食事。これは間違いなく楽しい。盛岡には市内を周遊する「でんでんむし」というバスが運行していて、これを利用する生徒が多かった。私も「でんでんむし」に乗ったところ、2つの班が一緒になった。盛岡城で降りて歩いて行くと「くるみ餅」という看板。それをみると「くるみ餅食べたーい！」という声。「プリン」という看板をみると「プリン食べたーい！」… 某班の某女子。食いしん坊である。それで良い。若いということはお腹がすくということなのである。盛岡歴史文学館。私はそこで妻へのお土産を買った（うさぎ柄のかわいいハンカチ）。巡視をしているといくつかの班に遭遇。「そばを食べました！」「わんこそばは高いので食べられなかったけど、体験コースがあつてわんこそば体験ができて 20 杯食べて楽しかった」という声。老舗のせんべい屋や餅屋などで中学生がせんべいや餅を楽しむ光景も、なかなか良い。啄木・賢治青春館で「銀河鉄道の夜」を買ったとドヤ顔をしていたのは増田 T である。札幌の書店でも簡単に手に入るのでドヤ顔をされてもなあ…と感じた私であった。ジェラートを落としてしまったら、店の人が作り直してくれたという話もあった。方言で話しかけられてうれしかった、という感想もあった。岩手の優しい方々に感謝である。旅行後の感想に「本州に行ったのは初めてなので、自分にとっては新大陸の冒険旅行」とあった。ステキな大冒険である。「お金を自由に使える喜びを知ってしまった」という感想もあった。こちらは少々危険な匂いがする感想である。

自主研修終了時刻の 15:30 にすべての班がそろえることができるか。それが第 2 のハードルだったわけだが、これは大失敗であった。ほとんどの班は時間を考えて行動して時間までには戻ってきたわけだが、遅れた班が 3 つもあったのである。しかもそのうちの一つは、班の 2 人がはぐれてしまい、どこに行ったかわからないというのである。はぐれてしまった場合は、ただちに本部に電話連絡することになっているのだが、その連絡も来ない。事故の可能性もあるので、たいへんな緊急事態である。

迷子になった 2 人とは連絡の取りようがないので集合場所で待つしかないわけだが、そうしている間にどんどん時間はたち、予定が崩れていくことになる。深刻な事態の中、一人盛岡駅に走った男がいる。はぐれた 2 人は集合場所を出発地点の盛岡駅と間違えて、そこにいるのではないかと予想されるためである。その男とは有賀 T である。有賀 T は走った。そして行方不明の 2 人を盛岡駅で見事発見したのである。2 人が無事で本当に良かった。拍手としか言いようがない。

最高到達点

札幌市立八軒東中学校 3 学年だより

2024.5.30 NO6 村田 昌敬

みすのくの旅 修学旅行記 ②

有賀 T の走りによって危機は去った。待機していたバスの中は有賀 T への拍手で包まれた。「走ってくれた有賀先生に、特別手当をあげてほしい」という生徒の声もあった。私も同感である。ぜひ、校長先生のお財布から、有賀先生に特別手当をさし上げていただきたい。それにしても 2 人が無事で本当に良かった。中学生は失敗があっても良い。大事なものは、失敗しないことではなく、失敗を糧にして大きく成長することである。

有賀 T の捨て身の行動に感動した私は思わず小説を書いてしまった。タイトルは「走れアリガ」である。ダイジェストを紹介したい。

アリガは激怒した。みんなを待たせて彼らはどこに行ってしまったのだ。どうして本部に連絡をしないのだ。学年の先生方、学年のみんなが、どれだけ心配していると思っているのだ。深い怒りと共にアリガは立ち上がった。そして決然と盛岡駅に向かって走り始めた。駅まではかなりの距離がある。果たして自分は走りきることができるのか。いや、そんなことよりも、なんとしても二人を見つけなければ、という強烈な思いでアリガは夢中で走った。途中、山賊が現れた。アリガは渾身の力で山賊と戦い、ついに倒した。もちろん腕相撲である。濁流もあった。昨夜からの豪雨で北上川は氾濫していた。しかしアリガは濁流を泳ぎ切った。ひたすら走るアリガ。その心には、愛する生徒のためならば死んでも良いという覚悟があった。25 分間全力で走りきったときアリガは力尽きて倒れた。「息が苦しすぎる…。ちょっとだけ休もうか」という心に襲われた。そうだ！私はこんなに走ったのだ。少しぐらい休んでも良いではないか！…しかし、アリガは負けなかった。自分の弱い心に負けなかった。そして盛岡の町を走り続けること 30 分。彼はついに盛岡駅についた。そしてそこで 2 人を見つけたのである。その見事な戦い、己に打ち勝った勝利の姿を見た王様は言った。「私の負けだ。人間の心を疑っていた私は間違っていた。許してくれ！…」と。

(注 これは小説＝フィクションです)

失礼いたしました。こんなことに 1/4 ページも使ってしまったダメな私を許してほしい。バスがホテルに近づく。ホテルの看板が見えてきた。「こ、これは…」。私は言葉を失った。看板が朽ち果てている。大丈夫なのか、このホテルは？ … 私は暗く悲しい気持ちになったわけだが、それはフェイクであった。あの朽ち果てた看板は、「期待値を思い切り下げておいて、その後、客を喜ばせる」というホテルの作戦だったようである。

迷子事件で、かなりの遅れが発生したわけだが、急遽、先についたバスのメンバーに室長を交代するなどの工夫を重ねて、なんとか夕食の予定時刻には夕食を取ることができた。急な変更があっても、力を合わせて臨機応変に対応し、しっかりと責任を果たす。— その姿は「さすが 3 年生」というほかない。

夕食は、モロヘイヤとオクラのおひたし。炙りサーモンと白身魚、ホタテのお刺身。米粉ハンバーグとポテト、にんじんの陶板焼き（デミグラスソース）。チキンの竜田揚げ。生野菜のサラダ、揚げ茄子。鰯の生姜煮、豚の角煮。茶碗蒸し。ひつつみ、大根、にんじん、長ネギの小鍋。千切大根、ご飯に味噌汁と果物という、和食中心のナイスなメニューであった。修学旅行というと、中学生向けの揚げ物ばかりメニューみたいな「子供だまし」のホテルもある訳だが、このホテルはちゃんとしたお料理である。日本の伝統文化を深く愛する私たちにふさわしいごちそうであった。

みんな元気で、すばらしい食欲である。通常の夕食のボリュームをはるかに超えているわけだが、ご飯をおかわりしている生徒も多い。どうでもいいことだが、完食率ランキングは2組男子がNO.1、3組男子がNO.2であろうか。女子の食べっぷりもたくましく、すばらしい。拍手である。

次は、これも楽しみにしていた自由時間。昨年と違いお風呂も大きいし時間も十分ある。驚いたことに、ホテルに着いて風呂をチェックすると男子露天風呂から女子露天風呂へ簡単に行けちゃうことがわかった。露天風呂に鍵をかけるか、先生がついて使わせるか。「せっかく露天風呂があるんだから、使わせてあげたいよね」という蒲澤Tの一言で急遽、私と蒲澤Tが露天風呂当番になり様子を見守ることに。露天風呂は太平洋が見えて波の音が聞こえる最高のロケーションである。残念なのはその広さである。普通なら2人。ぎゅうぎゅう詰めで4人というスモールサイズ。そこに中学生男子がなぜか4～5人ぎゅうぎゅう詰めで入ってくる。実に愉快な人たちである。そのような入り方をすると、彼らが去ったときにはお湯はなくなっている。大急ぎでお湯を張ると、また4～5人来てお湯はすっからかんに。その繰り返しであった。浴室の方を見ると真っ白な白熊のような姿。そう。日本の修学旅行の伝統文化「無限シャンプー」にやられている。浴槽を見るとイルカのショーではなくトドのショー（〇〇くんのことですがプライバシー保護のため固有名詞は言えません）。首にタオルを巻き真剣に水鉄砲を繰り出しているのはTくん。見事な技といえよう。前半クラスの風呂時間は8:20までだったのだが、8:10には無人となり、私も露天風呂当番の使命を終えた。露天風呂は小さかったが宿泊学習の深川ネイパルの風呂と比べればなんと幸せな風呂タイムであろうか。私は太平洋の波の音を聞きながら合掌し「小和田T、生徒のために何度も旅行会社とやりとりして、この旅行を企画してくれてありがとう」と一人つぶやいたのであった。

風呂当番を終えた私は交流部屋に向かった（担当だったので）。そこは4人がけのテーブル×24個＝96席の立派な会場であった。そこに男子7名、女子13名が集い、カードゲームなどして遊んでいる。まことに贅沢な空間である。いきなり「歌います」といって、ちょっぴりだけ歌って去る×3回、という謎の行動のAくん。カードゲームを楽しむ男子の一団。Mさんは、この日のためにカードゲームを4つも持ってきていて「面白い！」と大評判であった。

自由時間が終わり消灯準備。男子の部屋をまわって様子を見てみると、部屋にあるブラシで外靴を磨いている「靴磨きブラシ男」がいる。なぜか修学旅行などで必ずいる「俺の体、ナイスだろう」アピールをしてくる上半身裸男。オーシャンビューの部屋をやたらとうらやましがる有賀T（私たちは部屋にいる時間はほとんどないので、窓から何が見えても意味がないのだが…）。私が現れるといちいち驚くBさん（何かやましいことでもあるのか？）。トイレのカギを何度もあかなくしてしまうCさん。いろいろなドラマがあって楽しい限りである。10:40。消灯時間。消灯時間になると私語はゼロになり、ひそひそ話もない。実に立派である。「友人の睡眠をさまたげてはならない」ということがよくわかっている。言うまでもなく、旅が楽しいかどうかの根幹は「健康」である。睡眠不足で具合が悪くなったら、どんなに企画が良くても旅を楽しむことはできない。友人の健康を考えてしっかりと睡眠を取る。これが修学旅行の成功の鍵である。

最高到達点

札幌市立八軒東中学校 3 学年だより

2024.5.31 NO7 村田 昌敬

みすのくの旅 修学旅行記 ③

2 日目朝。今日も誠に爽やかな天候，と言いたいところだが，予報は少雨。朝から怪しい感じである。みなさんの健康を守るために，私たちは早朝も巡視をするわけだが「目が覚めても人を起こさない」生徒達に感心する。ある部屋で 5 時過ぎに人の気配を感じてドアをそっとあけると，そこには布団の上で正座した M さん。… 心臓に悪いので，早朝の薄暗い部屋で一人正座するのはやめてほしい。

6:00 起床。「よく眠れた？」と声をかけると「ハイ！」と元気な返事。「微妙…」や「5 時に目覚めてしまいました」等の声も。私は「ラジオ体操の歌」を流しつつ「朝だよ！」と声をかけて歩いた。余談だが家では毎朝，私は 6:10 にマリン（妻）に「朝だよー」と声をかける。そのときのマリンの寝ぼけた返事が私はとても好きだ。ホテルではそのような「寝ぼけた返事」は 2 割。早朝からテキパキとした行動が多数。まことに立派である。朝食集会は 6:45 の予定だったが，全員集まったのは 6:34。キビキビとした行動がうれしい。昨夜の夕食集会で有賀 T は語った。「せっかくの修学旅行。この修学旅行で厳しい話はこれっきりにしたい」…この修学旅行を，みなさんにとって最高の思い出にしたいという思い。みなさんへの信頼と期待。前日ろくに寝ていないのに 30 分も全力疾走した疲労。それらがすべて混ざり合った有賀 T の言葉は私の心に強く響いた。みなさんの心にも，有賀 T の思いが届いていることを，朝からのみなさんの行動から私は感じ，とてもうれしかった。今回，新幹線の速さに驚いたという感想が多く聞かれたが，新幹線はどうして速いのか。みなさんは知っているであろうか。蒸気機関車のように，かつての鉄道は先頭車両だけにエンジンがあり，すべての車両を先頭車両だけが一生懸命引っ張っていたのである。しかし新幹線は違う。すべての車両にエンジン（モーター）がある。先頭（リーダー）だけが必死になってがんばっても限界があるのだが，全部の車両にモーターがあれば革命的にスピードは速くなる。私がこの日の朝のみなさんの行動を見て感じたことは「一人一人にエンジンがある」すなわち，誰かに言われて行動するのではなく「それぞれが自分で判断して適切な行動をする」という「新幹線スタイル」を感じたのである。百数十人の大集団で，これはすごい。大変なことなのである。みなさんのすばらしい進化。拍手としかいいようがない。

ちなみに朝食メニューはハムエッグ，ウインナーソーセージ，塩鮭，筑前煮，生野菜に胡麻ドレッシング。小松菜としらす干しのおひたし，肉焼売，笹かま，牛乳，ヨーグルト，杏仁フルーツ。納豆，ご飯に味噌汁である。中学生の好みを踏まえた和洋中のお料理はバランスも良く，たいへんけっこうなごちそうであった。このホテルは平成 9 年に昭和天皇もお泊まりになったという由緒正しきホテルなのである。集合は素早かったが，しゃっきり爽やかな感じの生徒は 3 割。ぼんやりしている感じが 6 割。意識を失っている（幽体離脱？）感じが 1 割といったところ。早く意識を取り戻していただきたい。某女子は味噌汁の蓋があかず悪戦苦闘している。ここで焦ると大惨事となるので慎重にお願いしたい。「どこからでも切れます」と書いてあるのに切れず不満を述べているのは Y さん。「宣伝に偽りあり」。残念だがありがちなことである。水の入ったコップを手に持ち夢遊病のように歩いているのは S さん。レタスをおかずにご飯を食べている人物もいる。ヘルシーである。完全に寝ているように見えるが，ちゃんと食べている器用な人物もいる。食事スタートから 10 分ほどすると，みんな覚醒モードになり食欲もいい感じになっている。

朝からの動きがたいへん良くて、退室準備もバス乗車の動きも見事である。この日、私は3号車に乗り込んだ。バスでは学級代表が朝学活をしている。バス中で聞くCDも用意されていた。この旅行を成功させるために、たくさんの人が陰で準備を進めてくれている。そういう仲間の苦勞がわかり、感謝できる人になってほしい。

予報では降水1mm。しかしバスのワイパーは動かない。これは「絶対に雨を降らせてなるものか」という私の深い祈りのたまものである。山の緑がすごい。東山魁夷画伯の日本画のようである。絵心がゼロの私でも、思わず絵を描きたくなるような見事な森の新緑は「もののけ姫」に出てくる森を連想させる。バス中では1/3は寝ている。それで良い。若いということは眠たいということである。姿勢よく座った状態で眠っているDさんは、どこか釈尊の涅槃像に似ている。

トンネルを抜けると強い日差しが指してきた。次の目的地は陸前高田。2011年3月11日。この地を襲った東日本大震災の震災学習である。復興記念公園に着くと、三陸の海岸線には見渡す限り高さ12.5mの防潮堤。それはまるで「進撃の巨人」の城壁のようであった。ガイドさんの案内で遺構を見学して歩いたわけだが、最初に見たのはかつては「道の駅」だったという「タピック45」という建物。鉄筋コンクリートの頑丈な建物がグチャグチャに。耐力壁と呼ばれる頑丈な壁も粉々になっていた。一同は高さ14.5mに及んだ津波の威力の凄まじさを実感した。5階建ての建物が4階まで破壊されている様子。普通に存在していた街が、まるごと持って行かれて見渡す限りの平地になってしまった様子。7万本あった風光明媚な松林が、たった1本になってしまったこと（奇跡の一本松）。その後、45万本の松を植えたが、それが成長するには50年もかかるというお話などを伺った。ガイドさんは震災の時、小高い丘で、街が津波にやられる様子を直接見ていたそうだが、大切な人をたくさん失い、生活していた街が消滅する様子を直接目の当たりにしたガイドさんの言葉はとても重みがあり、私たちの胸に深く響いた。「自然災害から自分の身を守る知恵を学んでほしい」という強烈な思いが伝わってきた。

残念なことに10時過ぎから雨が降ってきた。雨脚は徐々に激しくなってくる。まずい…。次の震災学習は、アドベンチャー・ゲーム「あの日」である。班に一つスマホを貸してもらい、スマホで「生きる知恵」を探したり「QRボックス」を探して津波から避難する体験ができるという。生徒の感想には「どのように行動すべきなのかを選択するのがリアルで、実際に避難する人たちの気持ちがわかった」「避難すべきかどうかの判断も難しいということを知った。さらに、避難するにしても現実には単純ではなく、判断が正しいかどうかによって助かるかどうかが決まってしまうんだということを実感できた」「どこに向かうことがベストなのかという迷いが常にあり、正しく判断する難しさを知った」といったものがあつた。高いところをめざせば良いという単純の問題ではないのである。普段は体験できない貴重な経験といえよう。最後には指定された神社の境内に集合するわけだが、この階段がすごい。生徒の感想に「階段の角度がえげつない」とあつたがその通りである。雨の中、歩き回った最後に急な階段が待ち構えていたのである。「津波の恐怖も学んだが、転落死の恐怖も学ぶことができた」という感想もあつた。感想を読んで思わず笑ってしまった私を許してほしい。雨に濡れながらの決死(?)のアドベンチャーゲームは津波からの避難を実感する貴重な体験となった。

次は陸前高田での昼食。友達同士で好きな店を選んで食べるという企画はかなり楽しい時間であるが、これが一部の生徒にはなかなかの試練であつた。私は出発前に授業の中で確認した。「陸前高田は政令指定都市札幌とは全く違う。田舎を侮ってはいけない」と。「表現が良くない」とイエローカードを出されたクラスもあつたが、札幌市の人口は190万人。陸前高田市の人口は2万人。100分の1なのである。この現実を甘く見ると昼食を食べそこねることになる。 つづく(たぶん)

最高到達点

札幌市立八軒東中学校 3 学年だより

2024.6.3 NO.8 村田 昌敬

みすのこの旅 修学旅行記 ④

陸前高田での昼食。多くのメンバーは楽しく食事を終えることができたが心配していたことは起きてしまった。例えば私は第一希望だった中華料理屋へ行くと「売り切れ御免」という張り紙。まだ 12 時なんですけど…。第 2 希望の蕎麦屋は混んでいてダメ。駐車場の近くのスーパーにはフードコートがあった。多数の生徒が並んでいたが、札幌から旅行に来てどこにでもあるようなフードコートで食べるのも残念だと思いスルーして、とあるラーメン屋に入った。そこには 10 人くらいの生徒たちもいたのだが、まず注文を聞いてくれない。忙しすぎるのである。そもそも店主とお姉さんと二人だけでこれだけの客をさばくのは無理がある。「お手伝いしましょうか」と言いたい衝動に駆られたが、そういうわけにもいかず、私はかなり待たされた。生徒たちも散々待たされ、時間に間に合わないのではないかと気をもんだのである。まことに気の毒としかいいようがない。ラーメンの水準が極めて高い札幌という街から旅行に行ってラーメン屋に入るということが、そもそも間違いであるということを実は学習した。

昼食を終えた一行は猊鼻溪へ。バスの生徒たちはとても元気である。午前中は重いテーマ&雨もあり、はしゃいだ雰囲気はなかったが、ご飯を食べると人はこんなに元気になるのか。ご飯の偉大さを改めて感じた私であった。バス中では最初はハイ・テンションで音楽に合わせて歌ったりしていたが、しばらくすると多くの生徒は撃沈していた。やはり体はかなり疲れているようである。

ご存じの通り、岩手県一関にある猊鼻溪とは日本百景にも選ばれている「日本人なら知らない人はまずいない」という景勝地（私は中学校の修学旅行ではじめて知りましたが…）。猊鼻溪川下りのチケットにも「名勝」と書いているので間違いなく名勝なのである。このチケットの絵（地元高校の美術部の絵）がとても味があって私は気に入った。それ以上にナイスだったのが駐車場そばの土産店で流れていた「わんこ兄弟の歌」である。わんこそばをモチーフにしたキャラクター 5 兄弟が「これでもか」とばかりに歌い上げる岩手自慢のオンパレード。思わず、それを聴いて踊ってしまう生徒たち。特に I さんのテンションがすごい。これはすごい曲である。土産物屋のおじさんに聞くと、この曲は「岩手県観光協会の HP」からダウンロードできると教えてくれた。ぜひゲットしていただきたい。

いよいよ川下り。1 クラスずつ、40 人乗りの船に乗り込む。川下りという名前だが、実際には奥まで川を上り往復して戻ってくるのである。観光バスくらいの大きな木製の船を竿一つで繰り、急流を流れに逆らって上っていく技は驚きとしか言いようがない（ウソです。上ると言っても川面はほぼ平坦）。船頭さんの解説を聞きながら流れるゆったりとした時間はとても良い。台湾などの外国の方の船とすれ違うと挨拶が交わされるのも楽しい。川には鴨がいる。「鴨南蛮!」「蕎麦に入りたい」「剥製にしたい!」等の声。これがかわいい水鳥にかけられる言葉であろうか。船頭さんは「ヤバイ人たちが…」と驚いたかもしれない。雨は上がっていたが天候があやしかったので、船にはビニール屋根がついていた。これは少々残念だったものの兩岸の切り立った崖の景色は圧巻である。さらに楽しいのは魚への餌やり。生徒たちは船で売っている 1 つ 50 円の餌を買い、船から餌をまく。川には無数の「うぐい」がいて、敏捷に餌を食べに来るのである。

たまに巨大な魚が現れると船の上は大盛り上がりである。船頭さんが言うには、魚を捕ることが禁

止されているので巨大魚が育つという。餌をまいたらすぐに魚が反応する生徒もいるし、餌をまいてもスルーされる生徒もいる。「魚の気持ちを考えてまいたらいいんじゃない？」というアドバイスの声が聞こえる。魚の気持ちってなに…？体長 50 cmはあろうかという魚が、すぐ近くに顔を出すのはとても楽しいが、残念なことに巨大魚は無表情でぬるっとしているのかかわくない。私はふわふわの毛が生えていて、まるっとしている生き物（うさぎ）が好きである。船頭さんはかなりの高齢だがトークがお茶目で楽しい。船が一番奥に着くと一行は下船。学級写真を撮って絶景の景色を楽しんだ。ゆったりとした幸せな時間が流れる。猊鼻溪の断崖絶壁、川の向こう側に一つの穴がある。直径 2 m 程度であらうか。ただの穴なのだが、川のこちら側には「運玉（願い玉）」というものが売っている。3 個百円。土を焼いた焼き物のような玉である。玉には「恋」「絆」「願」「財」「福」などの文字が刻まれていて、これを投げて川の向こうの穴に入ると願いが叶う、という。とても楽しい企画で生徒たちは大喜び。願い玉を買いまくり、投げまくる。楽しくて大変良い。私はひそかに思った。このシステムを考えついた人物は天才だ、と。玉は安いのでついつい何度もチャレンジしたくなる。なかなか楽しいのでついつい玉を買ってしてしまう。しかも穴に入ったら記念のカードをもらえるというのである。なんとという商売上手。みなさんの中には将来、観光業界で活躍する人もいるかもしれない。どうか、お客さんが大喜びするような画期的なシステムを生み出せるように脳みそを鍛えてほしい。鍛えるのは今である。そのような「鍛え」に最も役立つ教科はなにか。そう。それは言うまでもなく数学である。

再び船に乗って川下り。帰りは船頭さんが「猊鼻追分」を歌ってくれた。峡谷のため、いい感じにエコーがかかって良い味を出している。船頭さんは「誰か、歌ってみてごらん。楽しいよ」と言い出した。そう言われたからと言って普通、中学生は「僕が歌います！」とはならないので、みんなで校歌を歌ってみたりした。楽しいひとときである。そこに周囲から背中を押されて満を持して登場したのが O さんである。O さんは船頭さんの隣に立ち、両側が壮大な崖というロケーションの中で堂々と Bling Bang Bang Bornなどを熱唱し船頭さんを驚かせたのであった。「声が響いてとても気持ちよかった」とは彼の言。すばらしい才能である。その後、船頭さんは熱心に O さんに「NHKのど自慢」への出演を勧めていた。

猊鼻溪でとても楽しいひとときを過ごした一行はバスでホテルに向かう。17:25。2 日目のホテル「ホテル花巻」に到着。ホテルへの入室の動きも、室長会・学年協議会の動きも、夕食集会への移動の動きもテキパキとしていてとてもスムーズ。一人一人にエンジンがついている。とても立派である。

夕食会場は、大きな結婚式場として使われる会場のようでリモートのプロジェクターや照明器具がずらり。見事な緞帳もあり、やたらとゴージャスな会場であった。夕食メニューは豚鍋。ステーキ。揚げ物プレート（エビフライ、鶏の唐揚げ、クリームコロッケ、ナポリタン）。煮込みハンバーグ。盛岡じゃじゃ麺。花巻温泉名物ひつつみ鍋。ご飯（花巻産ひとめぼれ）。チーズケーキ。オレンジ。ぶどうジュース。…である。若者にはちょうど良い、たいへんボリュームもあり、けっこうなお食事であった。食事の様子をお知らせしたいところだが、私には学年レクの準備という大切なミッションがあったため大急ぎで食事を済ませてレク会場に向かった。なぜか学校旅行で行くホテルの音響・照明設備は「打ち合わせと違う」ことが多い。今回も事前に確認していた設備とは全く違う状況があった。でも大丈夫。そうした事態を予測して私たちはポータブルのスピーカーを札幌から持参していった。増田 T が学年レクのために自腹で買ったスピーカー（20780 円）である。昨年、宿泊学習の大演芸大会は大変な盛り上がりであったが、今年はなにせ準備時間が短すぎる。はたして大演芸大会は成功するのか。様子は、次号、お伝えしたい。

期待感をあおって終わるという新技を使ってみました…

最高到達点

札幌市立八軒東中学校 3 学年だより

2024.6.4 NO.9 村田 昌敬

みすのくの旅 修学旅行記 ⑤

いよいよ待ちに待った大演芸大会が始まった。司会は盛り上げ名人、M・T・O である。O さんの「一生の思い出にしていきましょう！」とは少々大げさだが、この時間を最高の時間にしたいという熱い心意気が伝わってくる。M1 の登場曲が流れ、最初に登場したのは A さん・H さんの漫才コンビ「ファイヤーバード」。無実の罪で留置された受刑者に、母親から手紙が届き、その手紙を看守（細川）が読んで自首を促すという設定。「イエローカード」などの日常生活ネタも盛り込み、突っ込みどころ満載の手紙に A さんの鋭い突っ込み。どこからこういう発想が出てくるのかわからないが、見事な漫才で会場は大爆笑。終盤にはミスター KK も登場し、渾身のネタで彼らはトップバッターとしての大仕事をやり遂げたのであった。

2 番手は女子のチーム（T, H, O, O, T, T, H, K, I, T）による歌とダンス「ビート DE トーヒー」。このチーム、オーディションの時には全然楽しい雰囲気がなく、私は「これでは観客は喜んでくれない」とダメ出しをしたのである。その後、集まって相談していたメンバーはなぜかいきなりジャンボリ・ミッキーを踊り出した。メンバーがとても楽しそうにジャンボリ・ミッキーを踊る姿を見て「これはいけるかも」という光が見えた。会場では、あのオーディションの時の様子がウソのように実に楽しい時間となった。ボーカルは O さんと T さんから K さんにリレーして、盛り上げ上手の H さんへ。後半には盛り上げ隊（M, T, O）もダンスに加わり大いに盛り上げてくれた。目黒 T は旅行に行く前に「生徒に頼まれたのががんばるけどダンスが覚えられない…」とぼやいていた。しかし、楽しい思い出づくりのために生徒と一緒に踊ってくれる目黒 T が私は大好きである。

3 番手は N さん、K さんによる漫才である。ミルクボーイのテイストで学年の先生方をネタにしたオリジナルの漫才。「うちのおかんが好きな学校の先生を忘れたらしい」で始めるとぼけたやりとりで会場は笑いのるつぽと化した。身近な先生ネタが強烈に受けている。ネタの中に「その先生は学校で一番キュートで何をしてもかわいいんだよ」「だったらそれは、小和田先生やないかい！」というくだりがあった。私はその通りだと素直に共感した。しかし、レクの直後、O 黒先生はこのセリフについて「付度は良くないよね」とつぶやいていた。生徒は感じたままの感想を言っただけであり、私も心から共感したのだが、付度とは一体どういう意味なのだろう。疑問が残る。（解説…付度とはこういうことです）

4 つめは T さんの「悲しいとき」。これもまたオリジナルの先生ネタで場内は爆笑の渦につつまれた。最初の「はい、どうも T です！」の段階でなぜか場内はお笑いモード。「悲しいときー（悲しいときー）授業で村田先生に当てられて、とばされたときー」「悲しいときー（悲しいときー）永井先生にガチで怒られたときー」「悲しいときー（悲しいときー）目黒先生の授業で忘れ物をしたときー」など、練り上げられた秀逸なネタと絶妙な間が爆笑を誘う。T さんの語り口が実にナイスなわけだが、両サイドの盛り上げ隊（M, K, N, H）の合いの手や小芝居がまた絶品であった。

特別ゲストの昭和歌謡「あずさ 2 号」に続き、6 番目は「変な家」である。H さん、T さんの司会もナイス。T さんの「さて、さて、さて」。実に良い味がでている。増田 T が家族で引っ越しをするので家を探すという設定。謎の間取りを解説するネタだが、そのクオリティがすごい。配布されたペ

ーパーに書かれている「24 時間強制労働ゾーン」や「マッドサイエンティストの研究所」が気になる。ステージ上の雨穴（M さん）と正座して吹っ切れた突っ込みを入れる K さんのやりとりが抜群に楽しい。舞台袖で雨穴の声を出している O さんの芝居がナイス。セリフも練れていて本物のよう。設計士の栗原さん（T さん）の演技も見事。これまた場内大爆笑の渦である。それにしてもこのような楽しいネタをよく考えつくものである。感心してしまう。

7 番手は意表をついたイベント「腕相撲大会」である。S さんが「俺には決着をつけたいことがある！」と叫び、有賀 T と腕相撲の決着をつける戦いが始まった。これがまたメチャクチャ盛り上がった。なんと言っても Y さんの司会進行が絶品。「勝った方は立ち上がって拳を高らかにあげてください！」。という絶叫。これほどの盛り上げ上手はいない。最初の対戦は S さんと M さん。S さんが優勢だが、M さんも粘りに粘る。対戦をぐるりと取り囲む大観衆からは熱い声援が飛ぶ。激闘の末、勝者は S さんとなった。第 2 試合は A さんと有賀 T。こういう場合、先生は決勝戦で登場するものだが有賀 T は準決からの登場である。「有賀大祐！」のコールに場内はヒートアップ。有賀 T の「なんでだろう」風の準備運動が楽しい。試合開始。両者一步も譲らない白熱の展開。有賀 T が 2 度追い込むが土俵際までいっても押し返す A さん。大変な激闘である。ついに有賀 T が勝ったと思ったら机が倒壊。場内には無情にも「もう 1 回！」「もう 1 回！」の大コール。有賀 T は昨日の全力疾走の疲れも残っているはずである。体力を使いすぎて死んでしまうのではないかと私は心配した。しかし、有賀 T は再試合に挑み、今度は一気に決着をつけたのである。休む間もなく決勝。S さん VS 有賀 T。いかに若いとはいえ、有賀 T の体力にも限界がある。紹介のセリフが良い。「子育てで鍛え上げた俺に、勝てる者はいない！有賀大祐ー！」。Y さんの司会のセンスがすごすぎる。いよいよ勝負開始。実力は拮抗し、しばらく全く動かない状態が続いたが有賀 T が一気に勝負を決めた。「優勝は有賀大祐だー！」。Y さんの声が響く。拳を天に突き上げる有賀 T。場内は拍手大喝采の嵐。何という体力&筋力。昨日は足の限界に挑み、今日は腕の限界に挑む。明日は「首」であろうか。あまりに熱い対戦だったため実況が長くなってしまった。この旅行記は何号まで続くのであろうか。それは私にもわからない…。

8 番手は M さんの歌。曲目は「ドーナツホール」。M さんのシャウト系の歌の迫力はすごい。他の追従を許さない孤高の世界である。O さんに対抗して猊鼻溪でも歌ってほしかったものである。猊鼻溪で熱いシャウトをしたら船頭さんはびっくり仰天。腰を抜かしたに違いない。

ラストを飾る 9 番手は、今回の大演芸大会のキャスト全員が出演して「千本桜」にあわせてオタゲーが登場。千本桜のボーカルは H さん、O さん、K さん。オタゲーは T さん、O さん、T さん、ポップコーン踊りなどで盛り上げているメンバー多数。宿泊学習の大演芸大会を凌駕する、たいへんな盛り上がりの中、大演芸大会は大成功で幕を閉じた。

振り返ると 5/9。大演芸大会のオーディションの時、私は倒れそうになった。「これは無理でしょ…」という出し物ばかりだったのである（一発合格はファイヤーバードと腕相撲大会のみ…）。本番は 10 日後。いくらなんでもこれは無理か、と思っていたのだが、キャストの底力はすごかった。まさに **MISSION IMPOSSIBLE**。そこには不可能を可能にする戦いがあり、見事な勝利の姿があった。キャストのみなさんの真剣な努力、増田 T の渾身のアシストを心からたたえたい気持ちで一杯である。

厳しい日程の中、この日のために一生懸命準備、練習してくれたキャストの頑張りがすごいのはもちろんだが、仲間の頑張りを受け止めて、一体となって盛り上げているみなさんもすばらしい。この学年のすばらしい長所は、なんと言ってもこのようにメリハリがきいていることである。大事な話を聞くとときや勉強の時、集団行動の時に見せる真剣さと、楽しむときには一体となって思い切り楽しむというこのメリハリはすばらしいとしかいいようがない。みなさんはホント、最高です！

最高到達点

札幌市立八軒東中学校 3 学年だより

2024.6.5 NO.10 村田 昌敬

みすのくの旅 修学旅行記 ⑥

次は自由時間&風呂タイム。最高の時間である。このホテルは大浴場も立派だが、大きな露天風呂もある。もちろん男風呂から女風呂へも行けないので私は安心して風呂の前ロビーで、永井 T と貴重品を預る係をしていた。大浴場からは賑やかな声。でも良い。一般客がいないときは騒いでも良いのである。生徒の感想には「阿鼻叫喚（なんと教養のある表現）」「風呂場海賊」という表現もあった。大浴場で仲間と大騒ぎ。日本の伝統の修学旅行万歳！である。それにしても貴重品預り係は暇である。私は永井 T と語り合った。生徒はあまりにも幸せである。楽しいレクを終えて友達とゴージャスな風呂で楽しく大騒ぎ。それに比べて私たちはどうか。風呂にも入れず、生徒の貴重品を預かるという地味すぎる仕事。私たちの人生ってなに？という感じである。そう考えると風呂からあがった生徒は「私、とっても幸せです！」という顔をすべきである。というわけで、私たちは、みなさんが「どれだけ幸せそうな顔をして出てきたか」を判定し「もう少し幸せ感を出してほしい」などと全く不必要な声かけをしていた。人は暇だとしようもないことをしてしまうものである。

風呂タイムが終わると自由時間だが、多くの生徒が広々としたお土産店で買い物を楽しんでいる。一番人気は「カモメの卵」であろうか。外国の方に「大谷 is my brother」などと話しかけている生徒。T さんである。大谷選手と国が同じなだけで brother と言い切るコミュニケーション能力がすばらしい。

このホテルは和室中心で部屋もきれいで広い。2 人部屋は少なく、4 ～ 5 人部屋が多い。せっかくの修学旅行なので部屋の人数は多い方が楽しくて良い。「修学旅行でしか味わえない体験」が大切である。部屋の押し入れ（真っ暗）に 4 人で入り、恋バナをしたという女子。なんて楽しそうなのであろうか。ねどころジャンケンで盛り上がり、後ろに倒れた一人が机に頭を強打したという話もあった。大惨事にならなくて何よりである。今日もトイレのドアをロックしてしまう人がいた（トイレの中でドアノブのポッチを押してから外に出してしまうとトイレのドアはロックされてしまう）。彼は「勝手に閉まった」と主張していたが、ドアが勝手に閉まったらオカルトである。密かに階段ダッシュをして足を鍛えている生徒もいたという。ご苦労様である。

みなさんの安全を守ることが私たちの最大の使命なわけだが、21 時過ぎであろうか。増田 T が私に「先生、たいへんです！」と言ってきた。「貸し切りのはずの男子フロアの奥の部屋に一般客が 3 人入っていきました。その人達は中国人だと思います」というのである。それが本当なら安全管理上、心配があるので私は至急、確認するように指示をした。すぐに動いた増田 T から報告が入った。その客は私たちのバスの運転手さんであった…。生徒の安全を守ろうという増田 T の責任感はずばらしいが、日本人の運転手さんを勝手に中国人にするのはやめていただきたい。

このホテルは男女それぞれフロア貸し切りなのだが、女子のフロアから降りてきた M 黒先生がつぶやいた。「男子はエレベーターの両側の部屋を使っているのに、女子の部屋って片方の棟に集中してるんだよね。どうしてだろう？…」。話を聞いた私と有賀 T は思わず顔を見合わせた。ホテルの部屋割りを決めたのは他ならぬ M 黒先生だったからである。… 修学旅行の引率はハードな仕事である。先生方はかなりお疲れのようである。

夜の学級ミーティングではホテルのいろいろな部屋が割り当てられる。3組の学級ミーティング会場は結婚式場であった。結婚式場で学級ミーティングをする場合は、新郎、新婦、それぞれのご両親、神父さんの役を決めて「結婚式ごっこ」をするのが正しい修学旅行というものだが、3組のみなさんはちゃんと「結婚式ごっこ」をしたであろうか。

3日目の朝。実に爽やかな天候である。私が「ラジオ体操の歌」を流しながら声をかけて回ると「先生！虹がかかっています！」という声。岩手の空が私たちを見送ってくれている。それはなぜか。答えは簡単である。私たちの日頃の行いが良すぎるからである。今朝も絶好調の「裸男」が筋肉アピールをしてくる。私に筋肉アピールをしようというのか。動機が謎である。朝食集会は7:10スタートの予定だったが7分前には勢揃いしているので前倒しに。疲れがたまってくるとルーズになっていくのが常であるが、この学年のみなさんはそうはならない。実に立派である。席に着くと熱心にしおりを確認している生徒多数。すばらしい。ちなみに、しおりの表紙デザインはTさんの作品である。特急北斗とはやぶさを上下にあしらい、岩手県のキャラを中心に岩手の名物がてんこ盛りの実にステキな表紙である。T作品は宿泊学習の時には裏表紙だったが、今回は見事表紙に選ばれた。裏表紙はKさんの作品。新幹線はやぶさを中心に、写真のフィルム風に岩手名物をまとめたステキな作品である。Hさん、Hさん、Hさん、Hさん、Sさん、Aさん、Sさん、Oさん、Tさんのデザインもナイスだった。昨夜のKさん・Nさんの漫才で「村田Tの絵は何を書いているのかわからない」と言われるほど絵心がゼロの私としてはうらやましいかぎりである。朝食メニューは焼き魚。なめ茸。小松菜と油揚げのおひたし。ミックスプレート（卵焼き、ウインナー、肉団子、ポテサラ、グリーンカール、ミニトマト）。ミックスサラダ、ご飯（花巻産ひとめぼれ）。なめこと豆腐の味噌汁。ヨーグルト。焼き海苔。オレンジジュース。… たいへんけっこうなお食事である。うれしいことにクロワッサンとコーンスープも用意されていた。ざっと見て回るとクロワッサンが3割、ご飯が7割という感じ。しっかりと睡眠を取っているので体調不良を訴える生徒がいない。とてもうれしいことである。食欲もナイス。昨日は寝ぼけている人がかなりいたが、今朝は最初からすごく元気で、朝食はかなりのボリュームなのだが完食率は6割を超えている。私はクロワッサンにマヨ&ケチャをつけて食べている生徒を発見して少々驚いたが10人以上がそのように食べている。余計なお世話だが、できればクロワッサンは何もつけずにバターの風味を楽しんでほしい。どのテーブルにも、かいがいしく周りの人のお茶をついでいる生徒がいる。心温まる光景である。今日は制服。制服を着た生徒たちはとても賢そうに見える。

実は私は初日夜から「コーヒー欠乏症」に苦しんでいた。家を出る直前、マリン（妻）がスティックコーヒーなどの入った小袋を渡してくれた。隙間の時間に休憩してほしいというのである。コーヒー欠乏症になっていた私は、それを思い出して部屋でお茶碗にスティックコーヒーの粉を入れた。そして湯沸かしポットを探したのだがポットがない。「ポットがないホテルってあるの？…（たぶん、修学旅行なので片付けられた）」私は一人つぶやいてコーヒーの粉＝マリンの愛情の結晶をゴミ箱に捨てた。大演芸大会の時のTさんの声が部屋に響いた気がした。「悲しいときー」である。

バスの出発予定時刻は8:30であったが、11分前には勢揃いしたので出発となった。とても爽やかな天候である。なぜか小学校の校歌が聞こえる。隣の席の友人に子守歌を歌ってあげているのだという。どうして中学校の校歌じゃないの？と聞いたところ「歌詞を覚えていないから」というこたえ。狛鼻溪でも校歌を覚えていない生徒が多かった。残念なことである。将来、八軒東中の卒業生と出会ったときに校歌で盛り上がるできないのは困るので校歌の歌詞は覚えておいていただきたい。

最高到達点

札幌市立八軒東中学校 3 学年だより

2024.6.6 NO.11 村田 昌敬

みすのくの旅 修学旅行記 ⑦

9 時過ぎに一行は日本の大文化財、中尊寺に到着。実に良い天気である。境内には蛙の声。竹林。本州情緒爆発である。私は竹林が大好きである。高校の修学旅行で京都・嵯峨野の竹林を見たときには感動のあまり「将来は絶対に京都に住もう」と私は固く決意した（その後、その決意をきれいさっぱり忘れていたので札幌にいるわけだが…）。学級写真撮影が終わると「あいがとうございます！」という元気な挨拶がこだまする。気持ちの良い生徒たちである。近年の若者はなぜか「ありがとう」を「あいがとう」と言う。ガイドさんはかなりの高齢だが、水が流れるがごとく解説の流暢さには驚くばかりである。「皮のついている竹は今年の竹」とか「竹はイネ科の植物です」という理科の授業のような解説も楽しい。札幌では見ることができないうっそうとした樹齢 400 年の杉の木立を見て「トトロの世界ですね」とつぶやいていたのは T さん。すばらしい感受性と言えよう。宝物館には重要文化財がてんこ盛り。如来像に手を会わせる中学生の姿が美しい。曼荼羅や紺紙に金文字で書かれたお経などを熱心に見入る生徒たち。知的好奇心が素晴らしい。私は「修正液や修正テープがない時代、筆でお経を書き進めて、あと 5 文字というところで書き損じたらどうなるのだろう。いちからやり直しの？」などと余計な心配をしていた。大日如来像を見て「これってミイラってこと？この中に死体が入っているの？」。これは木像なのでそんなわけではないが、楽しそうなので良しとしよう。

それにしても長い長い説明をよどみなく語り続けるおばあちゃんガイドさんがすごい。みなさんに学んでいただきたいのは「あのような長い解説でも、反復練習すれば覚えられる」ということである。反復練習をすればするほどスピードもあがり定着率は加速する。チャレンジ 90 の存在意味がそこにある。反復練習を頑張りさえすれば、どんなに多くの内容でも完全に覚えることができるということ。ガイドのおばあちゃんは身をもって証明してくれたのである。

堅牢なコンクリートの建物の中に守られている金色堂。900 年前に作られたものとは思えない。本堂などを見学した後は境内で自由時間。気持ちの良い天候の中、楽しいひとときである。札幌からの他校の修学旅行生の姿も見える。境内で「あー楽しい！」と言いながら走り回る M さん。恥ずかしいのでここは他人のふりをするしかない。お守りや御朱印を熱心に選んでいる生徒。日本の伝統文化を大切にしてくれてうれしいかぎりである。家族のために「病氣平癒」のお守りを買っている心優しい生徒もいる。自分のために「ばけ防止」のお守りを買っている生徒もいる。余計なお世話だが、それが必要なのは私であってあなたではない。でも良い。人は必ず年を取る。備えあれば憂いなしである。般若心経の扇子を買ったという生徒。1 つ 1800 円だという。さすがに木刀は売っていないがミニチュアの刀などもあり、それを買っている生徒もいる。なぜ、修学旅行生はお土産店でこのようなものを買ってしまうのか。謎であるが、我家にも修学旅行で買った木刀がある。境内には目つきの悪いかわい猫がいたという情報を後から知った。猫を見つけたら、ただちに私に教えてほしかった。私は「ふわふわした毛が生えていて、まるっとした生き物」の禁断症状で苦しんでいる。

大吉がでるまで買い続けようと、おみくじの課金地獄にはまっているのは M さん。明らかに不適切な行動である。「おまえはわかっていない。おみくじは、そんな買い方をしてはいけない」と最初はたしなめていた友人の S さんも、何度もひいて楽しそうに一喜一憂する M さんの姿に引き込まれ、自分も追加のおみくじを買い出した。そういう弱さも人間らしくて良い。

「小吉と中吉をたしたら大吉だよな」という声。残念ながらそのような数式は成り立たない。おみくじを6回も引いていたのはSさん。「あと8分ある」と粘ってお土産を買うAさん。「また来ると旅費が3万円かかるので、ここで買わなければ損してしまう」と私たち教師に聞こえるようにアピールしている。気持ちはわからないでもないが、これはかなり危険な思考といえよう。

境内でベンチに座っていると先ほどのガイドさんが近づいてきて私に興奮気味に話しかけてきた。

「とてもステキな生徒さんですね。話を聞く姿勢が熱心ですばらしかったし、俳句の話などをしても聞いて聞いてくれてとても話しやすかったです。「それ知ってます!」という反応も多く、勉強もがんばっていることがわかりました。全然関心を示してくれない中学生もいるので、熱心に聞いてくれてとてもうれしかったです。ガイドが終わった後も、出会う生徒さんはみんな挨拶をしてくれます。感心しました」と熱く語るのである。うれしいかぎりである。私と一緒に学校生活を送っていると、どうしても私の教養がにじみ出て生徒に伝染してしまうようである（失礼。盛ってしまいました）。生徒が外国人旅行客と楽しそうに談笑する姿もみかけるが、その多くは英単語の羅列で会話になっていない。その姿を見て苦笑する目黒Tの表情が印象的であった。帰札後の英語の授業は、これまでよりもハードになるかもしれない。おみくじを売る商売上手なお姉さんを見て、ある女子生徒がつぶやいた。「あのお姉さんには中学生の顔がお金に見えているのかも」… 中学生の感受性の鋭さに驚く。自分の財布の中を見て「昨日まで諭吉がいたのに…」と寂しげなつぶやき。表現力が秀逸である。中尊寺からバス駐車場までの一本道。副担任が最後に降りてくることになっていたのだが、なぜか私たちが降りてきた後に生徒が来る。ちゃんと周りを見て生徒がいないことを確認しながら降りてきたつもりなのにどうして? 忍者なの? それとも私がもうろくしているってこと? 「悲しいときー」である。

バス乗車。一行は盛岡駅に向かう。修学旅行3日目とは思えないような元気。体調不良もなし。とてもうれしい。修学旅行では体調を崩してしまう生徒が出てしまうことは珍しくない。ひどい場合は、おうちの方に東北まで引き取りに来ていただくケースもある。みんなが元気に3日目を迎えるために、大きな役割を果たしてくださったのが養護教諭の引野Tである。引野Tのすごいところは体調不良が出たら適切な対処をするのはもちろんとして、体調不良が出ないように心を砕き、先回りして手を打つところにある。プロフェッショナルである。そのような動きをしているため、盛岡自主研修の時には昼食をとる時間すらなかった。引野Tはセブンイレブンで盛岡冷麺と三陸沖のわかめサラダ。岩手県産切り昆布のおにぎりを買って昼食としたのである。頭が下がるわけだが、コンビニでこんなに岩手のご当地メニューがそろうことに私は驚いた。そこで、私は巡視をしながら探索行動を開始した。その結果、ファミマにはご当地メニューは全くなく、ローソンには盛岡冷麺だけがあることが判明した。みなさん、岩手のコンビニでご当地メニューを買いたいときはセブンがおすすめです。

脱線してしまった。長くなりすぎて少々投げやりな気持ちになっている私を許していただきたい。はやぶさ19号をホームで待っているとホームには「大館名物花巻の鶏飯」と書かれた段ボール箱が届いた。そう。これが私たちの昼食である。新幹線に乗り込むと、お待ちかねの昼食タイム。鶏飯弁当である。弁当を配ってくれているのは保体委員。機敏な動きに拍手である。栗やインゲンの混ざった、鶏がゴロゴロ入っている鶏飯に卵がのっている。それにゴボウの煮物やだし巻き卵がそえられて、とてもおいしそう。中学生にとっては少々ボリューム不足かもしれないが、ここ数日、ごちそうを食べ過ぎているのでちょうどよいかもしれない。旺盛な食欲で弁当タイムはあっという間に終わったわけだが、その間も全員分の写真を撮ろうと写真屋さんは奮闘していた。写真屋さんの写真は少々お高いが、買いそびれるとあとで買うことはできないので、たくさん買うことをおすすめしたい（この2泊3日の写真屋さんの熱い働きぶりを見ていると宣伝したくなるのが人情というものである）。自由時間。おやつ、ゲーム、おしゃべりを楽しむ生徒たち。みんな元気でとてもうれしい。

最高到達点

札幌市立八軒東中学校 3 学年だより

2024.6.7 NO.12 村田 昌敬

みすのくの旅 修学旅行記 ⑧

新幹線の 3 列シートの回転にチャレンジしている生徒がいる。座席に荷物を置いたままで回転させようとして悪戦苦闘しているが、それは無理というものである。このことから 2 つのことを学んでほしい。① 何事も事前の準備が肝心 ② 大事なものはあきらめない心。… 野暮な話をして申し訳ないが、まもなく前期評価テスト。この経験をぜひとも試験勉強に生かしてほしい。

自由時間が終わると誰も声かけなどしていないのに潮が引くように自席へ。すばらしい…。立派すぎる。しかし、この後には、私たちには最後の大きな試練が待っている。そう。特急北斗への乗り換えである。停車時間はわずか 4 分。当然ながら降りる客もいる。この短い時間で百数十人全員が特急北斗に乗り込むことができるのか。全員で札幌に帰り着けることを祈るのみである。

はやぶさ 19 号は定刻にすべるように新函館北斗駅に到着（ちなみに、このあとの一関・盛岡間の新幹線は異音のため遅れが出ている）。いよいよ勝負である。列車座席にマッチするように整列し直して特急北斗を待ち構える生徒たち。ホームに特急北斗が近づく。緊張が走る。

私は、特急北斗を待つホームで小和田 T にささやいた。「万が一、乗り遅れる生徒がいるようなら身を挺してドアにはさまって時間稼ぎをしてくださいね」と。なぜ人に頼むのか。加齢のため骨密度も低下している私がやると、骨折して周囲に大迷惑をかける恐れがある。ここは、学校で一番キュートだけでなく、学校で一番たくましい小和田 T をお願いするほかない（失礼。これはフィクションです。このような、社会に大迷惑をかける危険な行為は絶対にしてはいけません）。

みなさんの機敏な行動によって無事に、最後にして最大のミッションはクリアすることができた。拍手である。特急北斗は札幌が終着駅なので乗り過ごす心配はない。あとは札幌に到着するのを待つのみである。生徒たちはとても元気に最後の自由時間を楽しんでいる。延々とカードゲームをしたり、恋バナをしたり。「これぞ青春」というシーンもあった。ふだん忙しい中学生にとっては貴重なひとときである。さっきから T さんは長時間立ちっぱなしでカードゲームをしている。中学生の体力はすごい。次の停車駅のアナウンスが入るたびに地図で場所を確認し「ついに通勤圏に突入！」などと教えてくれるのは、私の隣に座っている高木校長先生である。最初に「俺がババを持つ」と宣言してババ抜きを始め、最後までババを持ち続けて負けたのは K さん。ババは彼から離れたくないらしい。

生徒に声をかけると「修学旅行があつという間に終わってしまっって残念」「もっと旅行が続けたい」「あと 2 泊くらいしたかった」等と名残を惜しむ声。うれしい。本当にうれしい。みなさんの口からこのセリフを聞くために、小和田 T を中心に、私たち教師陣は真剣勝負で準備を重ねてきたのである。

最後の自由時間は終わり、特急北斗 15 号は 18:47 に札幌駅に到着。札幌の肌寒さから「札幌に帰ってきた！」という実感がわいてくる。この日は天候もよく、生徒達は意気軒昂に家路についた。迎えに来てくださったおうちの方もいる。感謝である。再び JR に乗って琴似駅をめざす生徒が多数。私は心の中で JR 北海道に対してつぶやいた。「近いんだからサービスで琴似駅まで特急北斗に乗せていってくれば良かったのに…」と。

思い起こせば、初日の過酷な早朝集合。「こんなところで？」と少々驚いた札幌北口交番横での学年写真撮影。特急北斗の速さに驚いていたら、もっと速かった新幹線はやぶさ18号。班で盛岡市内を歩き回り、盛岡名物の食事を楽しんだ盛岡自主研修。ホテルの看板に衝撃を受けた三陸花ホテルはまぎく。盛岡名物てんこ盛りのゴージャスな夕食。超ミニサイズの露天風呂。太平洋の波の音。

津波の恐ろしさを深く心に刻んだ陸前高田での震災学習。ガイドさんの深い思いのこもる言葉。避難の難しさを実感したアドベンチャーゲーム「あの時」。神社でみんなを待ち構えていたえげつない急階段。友人とお店をさまよった陸前高田での昼食。思わず踊ってしまった名曲「わんこ兄弟」。狛鼻溪の絶景と船頭さんの見事な竿さばき。突如水面から顔を出す巨大魚。「願い玉」に何度もチャレンジした川下り。ホテル花巻の夕食の大ごちそう。芸達者なキャストが大暴れ。底抜けに楽しかった大演芸大会。仲間と大騒ぎした、大きな露天風呂つき大浴場。買い物を楽しんだホテルの売店。

数々の文化財を見学し、説明を熱心に聞いてガイドさんを感動させた中尊寺。境内での楽しい買い物、おみくじ。目つきの悪い猫。スリリングだった停車時間4分の乗り換え。車中でのエンドレス・トランプ。… まことに濃密・充実の2泊3日は、本当にあっという間に終わってしまった。

修学旅行はとても楽しく、気持ちの良い旅行になったわけだが、百人超の団体旅行が楽しい思い出になるかどうかの大きなポイントはやはり「人にいやなことを言ったり、したりする人がいない」ということである。そのために「チクチク言葉」をゼロにする事前活動をがんばってくれたのは議長会＋班長のみなさんである。また、当日の行動の指示や、バス内での学活、夜の学級ミーティングなどをがんばってくれたのは学年協＋班長。ホテルでは室長のみなさんががんばっていた。初日の代理室長の動きもすばらしかった。しおりのデザインを頑張ったり、ボランディアでしおりの丁合をしてくれた人もいる。大演芸大会が楽しい思い出になるように漫才のネタや司会原稿を一生懸命考えたり、自分の殻を破ってダンスに挑戦した人もいる。最高の修学旅行を作ろうと心をつなげて、みなさんがそれぞれの立場でがんばった結果が修学旅行の楽しい思い出につながっている。すばらしいリーダー、そしてリーダーの思いを受け止めて協力していたみなさんの尊い苦勞を心からたたえたい。

この2泊3日の様々な場面で、ふだんは話をしたこともないようなクラスメイトや学年の仲間に、優しい声かけをしたり、心遣いをしたり、相手のことを思いやって親切な行動をする姿を見ることができた。そういう姿を数え切れないほど私は目にしたのである。自分にとって身近で大切な人に対しては、誰でも優しくする。それができない人はほとんどいない。やはり人として大切なことは、クラスメイトや同じ学年で、あまり話をしたこともないような人の気持ちを大切に考えたり、思いやりを持ってかわることができるかどうかである。それこそが「居心地のよい集団」の鍵になるということ、この旅行を通して私は改めて感じた。修学旅行で学んだことを大切にしてほしい。そして学校でも「どの一人も大切にされる学年づくり」にチャレンジしてほしい。それが私たちのめざす「最高到達点」である。それは簡単なことではないが、今回の旅の様子を見て、みなさんならきっとできると私は確信した。

帰着してから初の登校日は5/24。用務員さんが旅行中に教室にワックスがけをしてくださり、机やイス、TVなどすべてが教室から出ている状態であったが、生徒達は誰に何を言われなくても声を掛け合って役割分担をしてテキパキと教室を復元していた。その姿を見て「さすが！一人一人にエンジンがついてる！」とうれしい気持ちになった私であった。

おしまい

「少々」のつもりがすっかり長くなってしまいました。ぜひ、おうちの方への土産話のネタとして活用してください。この旅行記は卒業アルバムにはさんでおくとよいと思います。